

## 創立二十五周年記念式典

一九〇五（明治三十八）年に創立二十周年記念式典を挙行した本学は、わずか五年後の一〇年には創立二十五周年記念式典の実施を計画するに至った。この間、〇五年の経済学科新設や〇九年の商業学科新設、さらには一〇年の研究科の一科としての新聞学科の増設といった大学の拡充にもとづく学生数の増加を背景とした記念式典の実施計画であった。

計画は、〇九年十一月の学員会総会において提起され、第一に記念式典の挙行、第二に奥田義人（創立者の一人）の在職二五年を記念する顕彰事業の実施、第三に評議員会における実行委員の選定が決議された。

この決議を受けた評議員会は、記念会委員長に元田肇（創立者の一人）を、また委員には石山弥平（第一回卒業生）以下百数十人を選出した。

こうして発足した記念委員会は、記念事業の具体的な内容として、一八九二年の神田大火によって焼失した校

舎（二階部分）の再築、奥田文庫の開設、および寄付金募集を決定した。

校舎の建築工事は一九一〇年五月に始まったが、天候不順のためなかなか進捗せず、完成（建坪三七九坪余）をみたのは同年十一月十六日のことであった。このため、当初は十一月十一日に予定されていた記念式典が延期を余儀なくされ、翌一年四月三日に増築校舎の講堂で催されることとなった。

式典には、岡部長職わかべながもと司法大臣代理の柏原秘書官や添田寿一日本興業銀行総裁等の来賓のほか、学員・学生を合わせて数百人が参列した。これらの来賓や学員には記念品として『中央大学二十五史要』（中央大学創立第二十五年記念号『法学新報』第二十一巻第四号）と記念絵葉書が贈呈され、学生たちには記念絵葉書と赤飯弁当が配られた。

記念絵葉書は、萌黄色の下地の中央に創立二十周年

記念講堂を配置し、その四隅に菊池武夫学長（写真右上）、奥田義人理事（右下）、増島六一郎前校長・院長（左上）、伊藤悌治理事（左下）の四人の肖像を配している。

また、本学創立以来、学校経営に従事し尽力した増島六一郎、菊池武夫、奥田義人、伊藤悌治、および元田肇



創立25年記念絵葉書

記念会委員長、佐藤正之幹事、窪田欽太郎事務員の七人に対しては、特に学員会からギリシヤ建築様式の柱をあらわした校舎風の置時計が進呈された。

記念事業の一つとして開設された奥田文庫には、その後、ドイツ刑事法学の代表的な学者であったビルクマイヤーが半生をかけて蒐集した蔵書（約八千三百冊）が収蔵されることとなる。これが、いわゆる「ビルクマイヤー文庫」（大正六年の火災で焼失）である。この蔵書購入の交渉にあたったのは、ドイツに自費留学しビルクマイヤーに師事した講師大場茂馬（第五回卒業生）であった。

ところで寄付金を財源として行われた記念事業の収支は、いかなるものであったろうか。一六年の奥田義人学長の報告によれば、創立二十五周年記念式典関係費用の内訳は、収入が三万二千円余、支出が五万四千円余で差し引き二万二千円ほどの不足が生じていたとされている。とすれば、赤字の補填方法が気にかかるところであるが、結局この二万二千円余は大学が負担支弁したようである。